



地域の底力

下條村



長野県下伊那郡下條村

子供の歓声が響く村！ 下條村を訪ねて

東京からバスとタクシーを乗り継いで五時間。

長野県の山間部にある下條村が、

今全国から注目を集めている。

他地域から流入する若夫婦や子供が増えているのだ。

安い家賃、中学生まで医療費は無料、

文化施設の充実などさまざまな施策を打ち出し、

同時にコスト削減に知恵を絞る下條村を訪ねた。

取材：文千葉望 写真栗原克己



下條村の新井展望公園から見た村の光景。山々に囲まれた緑豊かな土地に集落と田畑が広がっている。子育てには絶好の環境だが、若い世代は自然の豊かさだけでは戻ってこず、そこに行政の力が問われる。

マンシヨンが建つ 過疎の村

下條村村長の伊藤喜平氏。もともとはガソリンスタンドと建築資材会社の経営者だった(左)。昼休みに電気を消している村長の席。こまめな経費節減にも熱心(右上)。村役場外観。人員は少ない(右下)。

新宿から高速バスで約四時間。飯田市に到着後、そこからさらに国道をタクシーで三〇分、目指す下條村に着く。ゴルフ場や温泉などの観光施設が見える落ち着いた集落だが、時折都会が現れて、訪問者を驚かせる。日本中、どこにでもあるよう

な過疎の村。だがこの下條村が今、静かな注目を集めている。高齢者の多い過疎の山村に見えているのである。それも、地元生まれではない流入してくる人々によって。彼らの多くがマンシヨンに住み、子供を産み育てているという。

全国では数少ないが、このように若者を引き付ける過疎地が確かに存在している。それはなぜだろうか。豊かな自然なら、日本中どこでも恵まれている。おそらく、立派なマンシヨンだけではわからない、明快な理由があるはずだ。

まずは、下條村の村役場を訪ねた。小ぢんまりとした建物の中は閑散としていて、あまり職員の様子はなかった。それぞれの持ち場でみな稼働中なのだ。伊藤喜平村長に話を聞いた。

「こうした地域をこれからずっと存続させていこうと思うなら、一番大切なのはまず人口だな」と伊藤村長は言う。日本は今超高齢化と人口減少を目前にしている。高齢化の進んだ地域は、

将来の日本の姿を示しているともいえる。

「私は村長になる前、村議会議員として各地域を視察をさせてもらう機会もあったけれど、人の減っていく地域で元気が出る地域というのは一カ所もなかった。これは当然のことだと思う。しかし、人を増やせばいいのはわかっているけど、実行するのは大変なことだね。特に少子化時代には、生まれてくるよりも亡くなる人のほうがどうしても多くなります。」

また、私が村長に就任した当時から、ふるさとを捨てて、都会へと人が出ていくばかり。問題は人が減っていくけば、ユーザーも減るといふことです」

「ユーザー」という言葉が口をつくのは、伊藤村長がもともとガソリンスタンド・建築資材を扱う企業の経営者だったからである。中小企業の経営者、それもオーナー系経営者の場合、自分の身を削るようになって日々を乗り切っている人が多い。伊藤村長もそのひとりだった。建築資材の仕事は景気の波を直接か

ぶる。また、人口が減れば売り上げも減っていくことは痛感せざるを得なかった。

「もうひとつ危機感を抱いたのは後継者の問題。この人はどうしても村におってもらわねば困るというような人材のほうが、先に離れていってしまう状況が、加速していくばかりだった。これをなんとかしなければと、さんざん村に掛け合ったりしたけれど、その当時の自治体は国や県に言われたことをするだけ、あるいは前例を踏襲するだけ。新しい方策は手付かずですよ。それでいて、コスト意識がない。あまりにもほかのことを知らないから、ダメ集団になってしまっていた。」

民間は命懸けで働いて、その中から税金を納める。だが、税金を使う側にコスト意識や感謝意識がなかったらどうしようもないでしょ。私が村長に就任してまず手をつけたのは、職員諸君の意識改革でした」

起業家の場合、借金と同額の生命保険に入っている人が少ない。万一の場合は、せめて





村人が協同でこしらえた農道に、誇らしげに彫られた完成日。誤字があるのもご愛嬌（右上）。自ら造った道路に立つ井村文人さん（右下）。村には田畑や果樹園が広がっている（左）。



民間企業で 職員研修を実施

就任してから半年間、「もう少しここに力を入れてみよう、こ

ちらはこのぐらいの範囲に抑えたらどうか」と言い続けたが、なかなか職員は理解ができない。悩んだ伊藤村長は、飯田市内の懇意のホームセンター経営者に頼んで、職員を売り場に立たせてもらうことにした。そこには、職員も客として出かけたことある。だが、バックヤードがどのように動いているかは知らなかったし、客商売の要諦ももちろんわかっていなかった。

「私にとっては当然のことだけれども、彼らにとっては青天の霹靂へんれきだったでしょう。知恵熱を出して、二日間休んだ者もおつたほど（笑）。毎日ノルマを与えられて、不特定多数の皆さんに商品の説明をして買っていただけ。商品知識も身につけなければいけない。ちゃんと頭も下げなければいけない。たった一週間ずつだったけれども、一一の班に分かれて助役以下全職員に行ってもらった。すごい抵抗はありましたよ。だけど、行ってみて『なるほど、こういう世界があったんだ』と初めてわかった。地方公務員は、磨けば光る素質を持っておる人が多いんです。だからちゃんと目の色が変わりましたよ。

今でこそ、公務員が企業で研修を受けることなんて珍しくな



くなったけど、その頃県の人事課が『公務員たる者を物品販売業の店頭立たせるとは何事だ。ちょっと趣旨が違いやせんか、新米村長？』と電話をよこしたのを覚えています」

もつと驚いたのは地方のマスコミだった。たくさん取材が入ったことで、村が注目されるようになった。すると村民の意識も変わってくる。役場が変わるのなら、こちらも腰を上げねばならないということだろう。

役場がやらねば 俺がやる

その一例が農道舗装工事である。以前、下條村では農道等の舗装も村の事業として行ってい

地域の人たちが「お役」で協同作業を行った道路工事風景。資材は村に提供してもらうが、作業はすべて自分たちで行う。多少のこぼこも手作りの証である（写真提供：下條村役場）。

村の中でもひととき目立つ3階建てのマンションは村外からやってきた若い夫婦向けの賃貸住宅。格安の家賃で提供するので、出産や子育てもしやすい(右)。分譲住宅も販売したが、全戸完売した。魅力的な村づくりの効果が現れている(下)。



「みんな、『道路の舗装なんて村がやるのが当たり前』という考えだったもんで、この地域の人も『そんなばかな話はねえ』と言わうわけだ。だけどそれをやらないうでおると、いつまでたっても舗装はされない。農道を舗装してないと、草は生えるし、車輪が踏む轍の真ん中は土が盛り上がって車の腹をこすっちゃうし、歩こうたって、ちゃんと歩けないよ。草刈りだって大変だしね。

た。だが予算がない。住民がいくら陳情しても工事は進まず、みなでこぼこ道に頭を悩ませてきた。
伊藤村長はこう考えた。もともと農業に携わっている人には、農閑期に道路工事などで現金を稼いできた経験がある。それなら資材はただで提供するから、自分たちで作業をやってもらおうじゃないか。
今、一番求められている行政と住民の役割分担の明確化を図ろうと考えたのである。
自分たちで農道舗装工事を始めた井村文人さんは、最初のうちは反発も多かったと証言する。

「みんな、『道路の舗装なんて村がやるのが当たり前』という考えだったもんで、この地域の人も『そんなばかな話はねえ』と言わうわけだ。だけどそれをやらないうでおると、いつまでたっても舗装はされない。農道を舗装してないと、草は生えるし、車輪が踏む轍の真ん中は土が盛り上がって車の腹をこすっちゃうし、歩こうたって、ちゃんと歩けないよ。草刈りだって大変だしね。

それならだいたい反対はあつたけど、自分たちでやってみようかという人間だけで先に始めようかということになったわけ」
工事は「お役」で行われた。地方ではよくこの「お役」がある。村内での草刈りとか清掃など、みんなで作るべき作業を無償で行うことである。一年やってみると、一〇〇メートルの舗装に一日もかからない上、草は生えてこず、サンダルをつかかけるだけで田んぼの様子を見に行けるなど、とても都合の良いことがわかってきた。便利さを実感した地区の人々は、積極的に村から資材をもらって工事を進めるようになった。
農家が多い下條村では農道だけでなく大変な距離になる。それを村で請け負っていたら、予算はいくらあっても足りない。村民が自立して関わることで、予算は使わずに済み、生活も改善されていた。

「自分たちで道を作るもんで、多少でこぼこしとつても文句は言わん(笑)。役場は楽だわな」
手作りの農道を見せてもらっ

た。舗装が進んでいる農道はほとんどが手作り。コンクリートで固めた道はアスファルトの道路のように平坦ではなく、作業の痕がそのまま残っていたりするのだが、機能としては十分。地域の人たちが目標を立て、その達成のためにみんなで汗をかく、それが真のコミュニティにつながるだろう。地域の町おこし、村おこしは全員参加が理想である。理想を追求する原点にもなり得るのが、農道舗装だったといえるかもしれない。

下條村の文化拠点となっている村立の図書館「あしたむらんど下條」。ゆったりとした平屋は、土地にゆとりがある地方ならではのもの。





館内は明るく、楽しい雰囲気。司書たちの努力がうかがえる。催しもしばしば開かれている(上)。熱心に本を読む子供たち(中)。本に関する相談には何でも乗ってくれる。外遊びの場所には事欠かない下條村だが、知的環境の整備にも力を入れているところが、若い親たちを引き付ける(下)。



6万冊に上る蔵書は、新刊も豊富に揃い、県下第2位の利用率。放課後や休みの日になると、子供たちがたくさん集まってくる。伊藤村長によれば、「下條村の村民は大人も子供もよく本を読む」という。文化度の高さは子育てにも魅力だ(上)。

特筆すべき 図書館の充実

道路の件はひとつの例。下條村では新卒職員の定期採用をやるなど、人を絞って、類似町村の五五％程度の人員で仕事をこなしている。地方では自治体がひとつの産業で、職員として雇ってもらうために地縁・血縁を使った根回しもあると聞くが、伊藤村長はそれまでなし崩しに続けられていた定期採用もやめてしまった。

「職員も企業研修でしっかり意識改革できれば、もともと仕事

量が決まっているから、自然と少数精鋭になってくる」

限られた財源の中で無駄なお金を出さなくて済むようになれば、自然に村は裕福になる。その代わりにやったのは、若者層が住みやすい村にすることだった。いたずらに箱物は造らない。だが、最低限に必要な、文化的環境を整えるための施設にはきちんと投資している。

都会並みのマンションを建て、三万六〇〇〇円で貸し出した(間取りは二LDKで、二台分の駐車場付き)。緑豊かな環境で、この家賃で暮らせるのだから恵

まれている。中学生までの医療費は無料。図書館やリハビリプールを備えた医療福祉保健総合健康センターなどの施設も充実している。

とりわけ図書館の充実ぶりは、この規模の地方自治体としては特筆もの。年間貸し出し冊数は、村民一人当たり一七冊と高い利用度である。内部は、冷暖房完備で、広く、明るくて居心地がよい。幅広いジャンルの本が約六万冊集められ、新刊も揃っている。読み聞かせの会など、子供向けのイベントもよく開かれていて、ここなら本好きの子供が育つだろうと思えた。地方で暮らす上で不安なのは、都市との文化格差である。子供を取り巻く環境が文化的で、ハイレベルな教育を受けられることを、親たちは望むからである。その上外に出れば豊かな自然がある。

「最初のうちは、『こんなに図書費がいるんか』って私も言ったもんだけど(笑)。ま、うちの住民はともによく本を読むな。それから、高齢者がよく働く。医療費も少ないんだよ。健康管理



保育所の中を元気に駆け回る子供たち。彼らが履いているわら草履は地域のお年寄りが作ってくれたもの。子供たちの健やかな成長を地域全体で見守っていることが伝わってくる。

の施策などはほかとあまり変わらないんだが。やっぱり生きがいを持つことは大事なね」
さまざまな施策の成果が出て、若者が下條村に住むようになってきた。ただ、近隣町村の人はマンションに入居させない。同じように苦しんでいる町村から人を引き抜くことはできないからだ。

子供は二人か三人が当然

村内にある保育所に行ってみて、驚いた。子供の数が多くのである。元氣一杯で、裸足にわら草履をはいた姿で走り回っている。みな、こんがり日焼けしていた。送迎バスを追っかけて、お迎えのお母さんたちに話を聞いてみた。すると、子供は二人以上がほとんどだという。三人という家庭も多かった。

「家賃が安いし、中学生まで医療費がタダだというのが大きいですね」
と口を揃える。子供のためには兄弟姉妹がいるほうがいいと思っている父母は、きっと多数派なのではないだろうか。だが、なかなか安心して生める環境がない。そこに下條村の価値が高まる余地があった。伊藤村長が初めての選挙に当選し、就任したときの人口は三九〇五名。今では四二一六名（四月一日現在）である。

また、下條村には独自の文化を受け継ごうとする動きがあり、



下條歌舞伎など、郷土芸能の伝承にも力を入れている。このような活動が盛んになれば、郷土を知る機会も増える。自分たちのふるさとがどのような歴史と文化を持っているのか深く理解すれば、世界中どこへ出て行っても、本来自分があるべき場所について悩むことはないだろう。

下條村が抱える課題とは

このように書いてくると、何から何まで順調だったと思われる

過疎の村なのに子供の数がとても多い。送迎バスによるお迎えタイムはにぎやか。若いお母さんたちは「子供は最低2人。3人も当たり前です」と話してくれた。





よく日焼けした、わんぱくとおてんばが揃う保育所。心置きなく遊べる環境があることがわかる。子供の歓声が聞こえることが、地域の活力を生み出している。



るかもしれないが、もちろん失敗もあった。例えば平成九年、若い家族向けのマンション一棟目を建てたときのこと。国の補助金を利用して建てたものだから、低所得者や高齢者も入居させなくてはいけないなど、さまざまな条件をクリアしなければならなかった。低所得者対策、高齢者対策はもちろん重要だが、趣旨が違う。また、第一号で入居した一組のカップルは地域活動に参加しようとしなかった。安い家賃という特権だけが欲しかったのである。地域に根付かない若者が増えても意味がない。

「最初は若い夫婦が来てくれたというのでスターだったんだけど、でも（笑）、半年もするとエゴの部分が見えてしまつてね。地域の守りごとができん人は、やっぱり家賃の滞納などの問題も起きがちで、結局去っていきました。その反省があつて、次は自力で建てることにしました」

周りからはいろいろな反発もあったという。確かに、マンション三階建ての建物は木造住宅の多い地域の中にあつて、異彩

を放っている。「そんな今っぽい住宅を建てるな」とか「低所得者や高齢者も入れないとダメだ」という声が伊藤村長の耳にも届いてきた。

「だけどね、うちの村はまだこれから発展していかないと生き残れないの。格好つけられる場合じゃないの。とにかく税金を払ってくださる人に入ってきてほしいというのが本音ですよ」

お金を落としてくれ、村にいい影響を与えてくれる。村づくりに参加して、汗をかいてくれる。そういう人が増えていて、力がついてきたらもっと別の施策も打てるはずだと伊藤村長は考えている。若い人口が増えてきたら、今度は産業振興、企業誘致であろう。法人税を払ってくれる会社が雇用ももたらしてくれば、これほど頼りになることはない。伊藤村長自ら誘致に出かける。そこで言われるのは「若くて優秀な労働力はどれだけ確保してもらえますか？」ということ。企業の立場なら当然の希望だろう。

「だけど、大手企業の城下町みたいになるのはいとは限らない。撤退されたら終わりだからな。また、先端的な企業が入ってきて、村の平均的給与とはまったく違うレベルの高給取りが集まってくるのもどうか。その加減は難しいですよ」

伊藤村長は、全国から視察の相次ぐ村になった今でも、この勢いを継続させるために知恵を絞る。若いカップルが育てた子供たちが、下條村に残ってここを故郷としてくれるかどうか。定住のための宅地造成にも積極的に取組んでいる。

自信はあるが、それでも悩みは尽きない。村長の悩みをひとときでも忘れさせるのは、村にこだまする子供たちの声だ。この規模の山村には珍しく、たくさんの子供たちの歓声が聞こえてくる。保育所では好奇心いっぱいの子供たちがカメラに群がってきた。表情が生き生きとしていて、とてもいい。「子供は希望だ」と言われる。下條村のチャレンジはまだこれから。だが、この子供たちの笑顔が、きつと推進力になることだろう。